

広い体育館に、キュッとバスケットシューズの音だけが響く。

あと五秒で試合終了だ。

最後であるうシュートが打たれたこの瞬間だけはいつも、水を打ったように静かで、少しだけ時がゆっくり進んでいる気がする。

（――あ。今日、一番きれいなフリースロー）

軌跡すら見えそうなほどに、流れるように穏やかに、まっすぐボールが飛んでいく。

ラスト二秒。いや、一秒。

ボールはゴールの輪に引っかかることなく、美しく網の中へと吸い込まれ、そして、落ちた。

わっと歓声上がる。

この瞬間の中心にいるのは、いつだって同じ。  
わたしの幼馴染の、千隼お兄ちゃんだ。



ろこもこうさぎ

絢辻 透

「あの、八乙女さん、最後のシュートとってもカッコよかったです！ 良かったら連絡先交換してくれませんか？」

「よかったら私も……！」

体育館のそばで千隼お兄ちゃんを待っていると、黄色い声が聞こえてきた。

今日お兄ちゃんを囲んでいるのは背が高くスタイルの良い、日焼けした肌が眩しい女性たちだ。たぶん今日試合をした、社会人バスケットチームの女性たちなのだろう。

試合のあとはいつもこうなってしまう。

「まだ当分は待つてないといけなさそうだなあ、とぼんやり眺めていると  
「すみません、急いでるので……こはるー！ 悪い、待たせて、今行くー！」

体育館の隅から隅まで届きそうな大声で、お兄ちゃんがわたしを呼んだ。囲んでいた女性たちが驚いている。

困んだ女性の輪から抜け出し、嬉しそうに近付いてくるお兄ちゃんに、わたしは気恥ずかしくなつて呟いた。

「お兄ちゃん、声大きいよ……」

「はは、悪い悪い。こはる、ぼつんと待つてたから早く行かねえと思つて」  
さつきまでバスケットボールを掴んでいた大きな手で、くしゃくしゃと頭を撫でられた。

見上げると首がちよつと痛いほど背が高い。元バスケット部のエースにして、現パーソナルジムトレーナー。どこか甘さのある整った顔立ちながら恵まれた体格の千隼お兄ちゃんは、どこに行つても女の人になんか困まれてしまふ人だった。

（幼馴染じゃなかったら、絶対住む世界が違う人なんだよなあ、お兄ちゃん……）

「置いてつたりしないよ、わたし。おいしいもの食べさせてもらうつて約束

したでしょ」

「はいはい、勝ったからアイスだろ？」

「ふふ、そう。トリプルね」

勝つたら三段アイス。もし負けちゃつたら高級フルーツ店のパフェ。今日はそういう約束だった。

千隼お兄ちゃんも休みの日、たまにこうやって社会人バスケットチームの助っ人に呼ばれる。

わたし自身はスポーツ全般に疎いのだが、こはるの応援があるとやる気が出る、帰りに美味しいもん食わせてやるから、という言葉に釣られて応援に来ているというわけだ。

(まあ、負けたところ見たことないけど。いつも圧勝してるから、アイス確定なんだよね)

「ジムの近くのアイスクリーム屋でいいよな？　いつもみたいにシャワー室寄るから」

「うん、いいよ。ベンチで食べてる」

試合の後は早く汗を流したいみたいで、毎回お兄ちゃんが経営している個人ジムのシャワー室に寄る。

わたしは頷き、お兄ちゃんに肩を抱かれながら市民体育館を出た。

(……後ろにまだ女の人がいたけど、いいのかな。スタイルよくて、美人な人ばかり)

お兄ちゃんはいつもこうだ。小さい頃から家が隣だったわたしの面倒を見るばかりで、どんなにきれいな女の人も相手にしたことがない。

わたしのように背が低くて貧相で、地味な妹分が隣にいても華がないだろうに。



(わたしも、もうちよつと大人の魅力みたいなのが欲しいなあ)

シャワー室のベンチに座り、アイスを食べながら考える。

大学の友達にはちらほら彼氏ができ始めていて、今まであんまり興味がなかった恋愛も意識せざるを得なくなってきた。

といつても目の前にある壁張りの鏡に映っているのは、どうにも貧相で垢抜けない自分の姿だ。

(こんなナリなのに、ついついお兄ちゃんみたいな彼氏欲しいなーって思っちゃうし……)

とても釣り合わないと分かってはいるけれど、どうしても千隼お兄ちゃんのことを頭によぎる。

千隼お兄ちゃんは——お兄ちゃんとは呼んでいるが、本当の兄妹というわけではない。小さい頃わたしは親の都合で隣の八乙女家によく預けられていて、その面倒を千隼お兄ちゃんが見てくれていたのだ。

（いつも迎えに来てくれて、何かあると助けてくれて……血は繋がってないけど、本当に理想のお兄ちゃんって感じなんだよね）

千隼お兄ちゃんみたいな格好いい彼氏が欲しいなら、やつぱり相応のセクシーさを持ち合わせた女性にならなくてはいけないのではないだろうか。さつき千隼お兄ちゃんを囲んでいた人たちは、みんな背が高くて、お尻がきゅつとしていて、そして何より——……。

「……こはる？ 何してんだよ、難しい顔で鏡見て」

「千隼お兄ちゃん……」

「うわっ！？ な、何だよ、まだ濡れてるだろ……！？」

鏡と睨めっこしているところで、ちょうどシャワー室から千隼お兄ちゃんが出てきた。

近寄ってたくましい胸筋をぺたりと触る。お兄ちゃんはウインドブレーカーの下は履いていたけれど、上半身はタオルをかけただけだった。

彫刻のように鍛え上げられた大胸筋の隆起を確かめるように何度かぺたぺた触ったあと、わたしは真剣な面持ちで顔を上げた。

「……千隼お兄ちゃん」

「お、おう、どうした……?」

「どうやったたら、こんなにおっぱい大きくなるの」

「……はあ?」

鳩が豆鉄砲を食らったような表情とはこのことだろうか。わたしは至つて真剣だ。

構わずじつと見つめていると、お兄ちゃんはしばらくの沈黙のあと、堰を切ったように笑い出した。

「ふっ、くく、ははは！ おっぱい、って……はははっ、こはるが、俺の……っ」

「だって、今日千隼お兄ちゃんの周りに集まってた女の人、みんなバインボインだったんだもん」

「ばいっ……ふは、はは、あははははっ！」

そんなに笑うことないのに。

天を仰いで爆笑しているお兄ちゃんに拗ねた顔をしてみせると、ひとり笑い終わった後に、悪い悪い、と頭を撫でられた。

「ほつんと……可愛いなく、こはるは。お兄ちゃんが囲まれてるの見て気になっちゃったか」

「うん……それに千隼お兄ちゃん、わたしよりおっぱい大きいし」

「おっぱいじゃなくて大胸筋な？　しょうがねえなあ、こはる、ちよつとこつち来てみ」

まだちよつと笑っているお兄ちゃんが急にわたしを呼んだので、不思議に思いながら近付く。何やらジム内の大きな器具のそばに連れていかれてしまった。

……もしかして、これをやらされるのだろうか。

「んな顔すんなって。だーいじょうぶ、俺がちゃんとサポートする。ここ座って肩伸ばしてて」

「こんなのできない……」

「バインボインになりたいんだろ？　ならチェストフライが一番効くから、ちよつとやってみようぜ。そうそう、高さ調整するから深呼吸してストレッチしてな」

そりやあ、バインボインになれるものならなりたいたいけれど、初めてなのにこんな器具のトレーニングができるのだろうか。

渋々座って肩を伸ばしていると、調整が終わったらしいお兄ちゃんが笑顔で持ち手を渡してきた。

……自分から言い出したことだし、仕方ない。  
ちよつとくらいはやってみようと、覚悟を決めて持ち手を掴んだ。

「いいぞこはる！　その調子であと一回！　もう一回！　おまけの一回！　よーしナイスだ、頑張ったな〜！」

「も、もお、むげい……っ」

あと一回を、一体何回やったのだろう。

お兄ちゃんにそのかされて随分頑張ってしまった。

ぜえはあと荒い息は止まらないし、全身の力が入らない。くったりとしたままベンチに戻ると、頑張ったな、とプロテインドリンクを渡された。

「こんなのでほんとにおっぱい大きくなるのお……？」  
「でかくなるって。ここに効いたろ？」

トン、と肩と胸の付け根辺りを指差される。

確かに効いたけれど、そのへんが大きくなるのはちよつと違うような。

わたしは渡されたドリンクを飲みながら、隣に座ったお兄ちゃんの大きな肩へと凭れかかった。

「うーん……なんかこう、もつと、ぽよん♡　ってなる感じのがいいんだけど」

「ぽよん♡　ってなるにも土台が必要なんだっつもの。っーか、なんでそんな

でっかくなりてえんだよ。今のままでも十分可愛いだろ、こはるは」

「それはその……彼氏、欲しいなあ、って」

「……彼氏？」

ぴく、と。

千隼お兄ちゃんのたくましい肩が揺れた。不思議に思つて見上げると、すつと目を細めたお兄ちゃんがいて、なぜかドキリとする。

お兄ちゃんはわたしの前ではいつも笑顔だから、こういう顔は見慣れない。

でも、そんなに変なことは言っていないはずだ。

わたしはただ、千隼お兄ちゃんみたいな彼氏が欲しいなつて、そう思っただけで。

「……彼氏、なあ。ちょっと前まで、興味ないって言つてたのに？」

「う、うん。でも大学の友達とか、彼氏できて遊べなくなつちやっただ子とかいるし……」

「それで何、おっぱい大きくなれば彼氏できるかも、って？」

「そう、だけど……っひゃ、なに……っ」

突然ひよいと抱き上げられ、お兄ちゃんの膝の間におろされてしまった。お兄ちゃんは背も高いし胸も背中も広いから、まるで子供と大人みたいな体格差だ。

「こはる。本当に、そう思うんだな？」

「え？ う、うん……わたしももう、大人だし……」

そうか、と長いため息とともに腕を回されて、なぜだか落ち着かない。

小さい頃くっついてじゃれ合っていたことはあつたけれど、今のこれはその時とは違う雰囲気があるような。

不安になって上を向いて見上げてみても、お兄ちゃんの顔は逆光でよく見えなかった。

「わかった。じゃあ、俺が大きくしてやるよ」

「へ……っ？」

「筋トレ以外にも方法はあるからな。こはるも、お兄ちゃんとなら安心……  
だろ?」

「えっ、えっ……待つて、おに……っひゃう、」

回された腕でぎゅつと力強く、後ろから抱きしめられて、潜められた低い  
声で囁かれる。

いつも快活で爽やかな千隼お兄ちゃんの声が全然違って聞こえて、ぞわ  
りと背筋が粟立った。

「大丈夫、痛いこともキツイこともしねえから。こはるはただ、じーつとし  
てればいいだけ……さっきのトレーニングより、ずっと簡単だぜ」

「?? ほ……ほんとに、じつとしてれば、いいの……?」

「そう、じつとしてるだけ。簡単だろ? こはる、お兄ちゃんとトレーニン  
グするよな?」

きゅつと奥歯を噛む。いつもと雰囲気の違い千隼お兄ちゃんがほんの少  
し怖いけれど、腕の中に閉じ込められてしまつて抵抗することができない。

小さく震えながらこくりと頷くと、優しい声でお利口さん、と言われて身体力が抜けた。



すり♡ すり♡ さすさすさす……♡  
広いトレーニングルームに、布を擦るような音と、お兄ちゃんの声が響いている。

「そんでき。胸って筋トレ以外にも、女性ホルモンの分泌で刺激されて大きくなんだよ。こうやって触ってやると刺激になるから、毎日……聞いてっか、こはる？」

「~~~~~……ンダ……きいて、る……っ♡」

いつまで、こうしていたらいいのだろう。

さつきからずっと、千隼お兄ちゃん腕の中で、筋トレがどうのとか、ホルモンがどうのなんて話を聞きながら、おっぱいの周りを撫でさすられている。

「こはる、身体揺れてる。駄目だろ、じっとしてろって」

「ンツ……だって、これ、くすぐりたい……っ♡」

「ちよつと撫でてただけだろ？ 我慢、我慢」

脇にほど近い胸の膨らみを撫でられる度、じわじわと身体が火照っている。

最初はくすぐったいだけだったのに、だんだんと変な気分になってきてしまった。もう逃げたいくらいだけれど、千隼お兄ちゃんの足にしっかりと身体を挟まれていて動けない。

（うう、くすぐったくてぞわぞわするし……たまにおっぱいの下のところまで、なぞられると……なんか、ぞくんってして、変……♡）

「こはる、ここ触る度ビクってするな。どんな感じ？」

「うえ……っ？ わ、わかんないっ、っひゃう♡ やっそこ、やだ……っ！♡」

すりすり♡ なでなで♡ むにゅんっ♡

目敏く気付かれた千隼お兄ちゃんの指腹が、ほんのわずかな膨らみしかない下乳をなぞる。くすぐったさをこらえていたら軽く揉まれてしまって、慌ててお兄ちゃんの腕を掴んだ。

「……お兄ちゃんに触られんの、嫌か？」

「っ♡ だ、だって、ぞわぞわする……うづっ♡」

嫌って言ったらいけないような気がして、言い訳するみたいに俯きながら小さく言うのと、大きな手のひらが開いて小さな膨らみを包んだ。むにゅむにゅ♡ と柔らかく揉まれて言い知れない感覚が襲う。

無遠慮な手を必死に引っ張ってみるけれど、千隼お兄ちゃんの引き締まった腕はびくともしない。むしろ叱るように抱き込まれてしまった。

「ぞわぞわしてんの、いいことだから大丈夫。ほら、手は膝の上な」  
「~~~~づ♡ うう……恥ずかし、っんう……っ♡」

言われた通りに膝の上に置いたけれど、身体が落ち着くことはない。

ふに♡ ふに♡ と揉まれ、くすぐりたいところを何度も撫でられているうちに、だんだんと身体がおかしくなってきた。腰の疼きは止まらないし、おっぱいの先っぱがぷく……♡ と硬くなって、むずむずする。

(うう……何これ、一人えっちでこんな風になったこと、ないのに♡ お兄ちゃん、の……お、男の人の、おつきくて……ちよつとかさついた手で、触られると、な、なんか……——っあ？♡ あ、うそ、ブラ……取られちゃった……?)

考えているうちにぱちん、と音がして、胸元に小さな衝撃が襲う。

途端に胸元の締め付けがなくなつて、外れたブラジャーをずり上げられてしまった。慌てて身を屈めたけれど、もう胸元に潜り込んでいる手には何の意味もない。

「こーはーる、駄目だろ、屈んじゃ。ほら、身体起こせって」  
「ううっ♡ やだあ、お兄ちゃん、なんでブラとるの……っ」  
「だってこはる、汗かいてきてるだろ？ 息も荒くなつて、あちこち敏感になつてきて……締め付けないほうが絶対、効果出るから。この調子でトレーニング、頑張ろうな……？」

すりすり、くるくる♡ ふにふに♡

いつもより格段に低められた声と一緒に乳輪のまわりを撫でられて、頭の中がぱちぱちしてくる。

お兄ちゃんの手は辛うじてキャミソールの布の上からだ。けれどだからこそ、先っぽがつん……♡ と尖つてきてしまっているのに気付かれてしまいそうで、恥ずかしい。

(~~~~~うう、ダメ……ずつとおっぱい揉まれて、先っぽのまわりくるくるされるの、やだ♡ むずむずするの止まんない♡ からだ、勝手に動いて……お兄ちゃんの指に……乳首、当てようとしちゃう……っ♡)

「こはる」

「ンう、つな、なに……？？♡」

「駄目だつて。そんなに身体揺らしたら、俺の指、こはるの乳首に当たっちゃうだろう……？」

「~~~~ッ！？♡ ちが、これは、っんうう……っ♡」

ひそひそ話する時みたいなの、わざとらしく潜められた声が鼓膜に響いて、カツと頬が赤くなる。

——バレちゃってた、わたしが、当てようとしてるの。

耐え難いほど恥ずかしくて、なんとか身を振ろうとしていたら片腕で腕も身体もホルドされてしまった。慌てているうちに、ぴと、と耳元に千隼お兄ちゃんの形の良い唇が触れる。

「……それとも、触って欲しかった？」

「！？ ちがッ、ちがううっ、ッあ！？♡ やめッ、あ、うああ……っ♡♡」

カリ……ッ♡

ぷっくりと主張してしまったそこにお兄ちゃんの、切り揃えられた爪先がわずかに触れた。

やめてって言いたいの、カリカリカリ♡ つて連続でされてしまって、びくびくと身体を震わせながら濁った声しか出すことができない。

「すっげえ反応……こはるのそんな声初めて聞いた、かーわいい……♡」  
「やあ、あつ、やつ♡ これやだあつ♡ おびいちや、やめてえ、~~~~♡」  
「怖がなくても大丈夫だって、こっちの方が女性ホルモンいっぱい出るぜ。こはるのおっぱい、お兄ちゃんがちゃーんと大きくしてやるから。一緒に頑張ろうな……？」

すり♡ すりすり♡ カリカリカリ♡

言い聞かせるみたいなの優しくて甘い声音と一緒に、硬くなった乳首を甘やかすように撫でられては引つかかれて、喉がきゅつと締まっていく。

こんなの恥ずかしくて嫌なはずなのに、はっ♡ はっ♡ と嬉しそうな息を止められない。

(なにこれ♡ なにこれ♡ きもちいい♡♡ 両腕ともぎゅって抑えつけられて♡ 動けなくて、くるしいの♡ 先っぽされると、頭ぱちぱちして……♡ 勝手に、か、かたくなって……お兄ちゃんの指、嬉しい嬉しいって、しちやうよお……♡♡)

「んううっ、っあ♡ あっ、あう♡ うー……♡」

「乳首カリカリされてるだけでそんな声出しちまうんだ、こはる……マジで可愛い……なあ、これされてると、どんな感じ？」

「ふえ……っ？♡ や、わかんや……っアっ！？♡ あっやだ、ごめ、っやあぁ……っ♡♡」

「わかんなくないだろ？ そんなに甘ったるい声出して身体ぶるぶるさせてんだから。なあ、お兄ちゃんに教えて？ 乳首カリカリされてんの、どんな感じ……？」

首を振った途端、先っぽをつままれてにゆりにゆり♡ 擦られておなかにぎゅっと力がこもった。そんなの知らない、わかんない、って言いたいけ

れど——……ほんとうは、頭の片隅では、わかってる。

これがどういうことか。千隼お兄ちゃんが、わたしに何を、聞いているのか。

「うう、言えない、恥ずかし……ひ、っー？♡ あっやだ、それ、つまむの、やだ、っああ♡」

「お兄ちゃんしか聞いてないんだから、恥ずかしくないだろ？ な、こはる、教えて。こうやって手のひらで胸寄せられて、ぴん♡ って突き出た先っぽのところ、摘まれて引っ掛かれんの……どんな感じすんの……？」

「——……ううっ♡ どんな、って……～～～そんな、そんなの……っ♡」

いつもと違う、熱っぽくて低くて甘い、お兄ちゃんの声。かたく尖った先っぽを絶え間なく引っかかれる度、思考回路がひとつひとつ焼き切れるみたいだった。

「く……つき、きもち、いい……っああ♡ あッ♡ ううっだめえ、おにいちや、直接だめッ、っあああ♡」

「よく言えたなあ、こはる……♡ 気持ちよくなるの、女性ホルモンが出てる証拠だから、な。お兄ちゃんの手で、もっともっと気持ちよくなるかな……？」

こすこす♡ こすこす♡ カリカリカリ♡

とうとうキャミソールもたくし上げられ、露出したおっぱいの先っぽを甘やかに引っかかれてしまった。嬉しそうな声に頭の中にどんどん霞がかかっていく。

(うう♡ 言っちゃった♡ お兄ちゃんの手で気持ち良くなってるって、認めちゃった♡ うう、先っぽのくぼんでるとこ、ほじるみたいに捏ねないでよお♡ それされると、お腹にぞくぞく伝わって……お、おまんこ、疼いちやう……♡)

「うぐ♡ ち、ちはや、おにいちゃ……それ、やらっ、ああ♡ さきっぽぐりぐり、やだあ♡」

「ふ……嘘だな、さきっぽぐりぐり気持ちいいんだろ？ こはる、ぐりぐり

する度俺の身体に腰押し付けてきてる。ほら、今も……♡

「っや、あ、あっ♡ ちがうっ、ちがうもん……っ♡」

「違うって言いながら腰振んのやめられてないの、エロすぎ……お兄ちゃんのことこーんな煽って、悪い妹だなあ……？」

苛立ったみたいなの熱い息が首元にかかって、きゅうん……♡ と喉が鳴る。

ひどい。そんなつもりなのに、お兄ちゃんにえっちなトレーニング、されてるだけなのに。そう言いたいの口からは甘ったるい声が出るばかりだ。

せめて腰を動かさないようにと荒い息について快感を堪えていたら、突然刺激が止んで——足を、持ち上げられた。

「っお!?!♡ な、なに、やだ、これやだあ、恥ずかしい、千隼おにいちゃんっ!♡♡」

「腰動かさないうようにしたいんだろ? こうやって足開いて、俺の足にかけてやるから。あー、はは……すげえな、こはる、前見てみ……?」

後ろから抱きしめられたまま、お兄ちゃんの鍛え上げられた太ももに足を乗せられてしまった。

ほとんど無理やりM字開脚をさせられる体勢になってしまったて恥ずかしくない。前なんて絶対見たくないのに、顎を持ち上げられて正面を向かされてしまった。

大きな鏡に、足を開かされて、熱っぽく全身を上気させたわたしの姿が映っている。

「——あ……うそ、や、やだあ、お兄ちゃん……♡」

「やだじゃねえだろ、そんなエロい顔して。あーあ、スカートん中、丸見えで……パンツ濡らしてんのも、丸わかり……♡」

片方の手がお腹を辿って、スカートをたくし上げていくのにひくん♡と内ももが震えてしまう。

ドキドキと高鳴る心臓のまま、その手がどこに行き着くのかを見ていたら、耳元で「期待しすぎ」と笑われてしまった。

「すっげ……なあ、聞こえただろ？　今。パンツの上からでも、ぬちゅっ♡　って音……」

「~~~~~♡　や……なんで、だめ、さわっちゃ、っあうっ!?!♡」  
「これもトレーニングだつて。いっばい気持ち良くなれば、それだけ女性ホルモン分泌されて、おっぱいもでかくなんの。ほら、集中、集中……♡」

ぬちゅ♡　ぬりゅっ♡　カリカリ♡♡

すっかり濡れてしまっているパンツの上からおまんこを撫でられて、一緒に乳首も引っかかれる。ずっと疼いていたそこが快感をもらえて嬉しうにひくひく♡　してしまった。

あまりに恥ずかしくて乳首をいじる腕を弱々しく掴んでみたけれど、引き締まって血管の浮き出た腕はびくともしない。

「ううっ、あつ、うあぁっ♡　だめ、ほんとにつ、おにい、ちや……っそこ、やらあぁっ♡」

「こーんなぬるぬるにさせといてやだはねえだろ？　ああほら、クリも乳

首みてえに勃起して、コリコリになってる……」

「っひい♡ ううっだめ、お兄ちゃんっ……だめ、ほんとに、もお、きちやうからあ♡」

尖ってしまった乳首もクリトリスも一緒にコリコリ♡ されて、ぞわぞわぞわ……っ♡ とお腹に快感がたまっていく。

気持ちいいで頭がいっぱいになって堪えきれない。助けを求めるように頭を振ると、小さな笑い声と共に、うなじへ柔らかく口付けられた。

「ふ……ほんと可愛いな、こはるは。そういう時は、イク、って言うんだよ……♡」

「ふあ、あ……？♡ いく……う、ん、んっ、~~~~いつ、いく……♡」  
「そうそう、じょーず。お兄ちゃんの指で、イクイクしような……」

少し上擦った嬉しそうな声と一緒につまんだ乳首をほじられて、とろんと睨がとろけていく。

何をされているかももうよくわからない。ただお兄ちゃんの指が気持ち

いいということだけで頭がいつぱいになっていく。

開いた足に力がこもり、つま先がぴんっ♡と、伸びていった。

（あ、あ、おまんこヒクヒクとまんない、だめ♡ 乳首やさしくコリコリされて♡ うずうずしてるおまんこ触られて、いい子だねって甘やかすみたいに撫でられるのだめ♡ きもちいいのきちやう♡ いく♡ 千隼お兄ちゃんの指で、いくいく、しちやう……ッ♡）

「ああだめ、いく、おにい、ちや……いく、イ……つきゅ、ううづっ、  
~~~~っ♡♡」

びくんっ♡♡ ぶるっ♡ ぶるぶるぶる……♡

脳天まで突き抜けるような快感に震えが止まらない。何度も跳ねる身体をぎゅうっつと抱きしめられながら、わたしはイってしまった……♡  
褒めるように頬へとキスされて、余韻に頭がぼわぼわとする。

「かーわいいいき方……♡ 初めてなのによく頑張ったな、お疲れ、こはる」

「は……ふう、うう………♡ こ、これで……おわり……？」

「おう、終わり。今日はな」

「き、今日は……っ？」

開いた足を戻され、力の入らない身体を横抱きにされながらも、不穏な一言にぴくりと反応する。

恐る恐る目線を合わせると、気付いたお兄ちゃんがにこりと爽やかな笑顔を見せてこう言った。

「トレーニングなんだから、毎日頑張るだろ？ こはるのおっぱい、お兄ちゃんが責任持つて大きくしてやるから。な」

ひ、と喉が引きつる。

また明日からもこれをしなきゃいけないなんて。

恐ろしいくらいなのに、なぜかイッたばかりのおまんこが期待するように、ひくん……♡ と震えてしまった。

(中略)



s i d e .. 千隼

トレーニングを初めてから一週間ほど。

まさか本当に胸だけでイけるようになるなんてな——と感慨に耽りながら、寄りかかかる身体をぼんぼんと撫でる。

随分疲れさせたらしい。

眠ってしまったこはるの、時折ぴくりと動く密度の濃い睫毛を眺めなが

ら、よくできた人形みたいだな、なんて思う。

（小さくて、無垢で、無防備で。俺の言うことはなんでも素直に聞いちまうんだよな、こはるは）

タオルで柔らかく身体を拭き、少し腫れている胸へと保湿クリームを塗り込む。

柔らかく撫でているだけで、こはるの身体はぴくぴくと小さく揺れ、むずがるような甘えるような吐息を漏らした。

「んう……くすぐりたい……」

「ふ……ごめんな、こはる。寝てていいから、ちよつとだけ我慢な」

ほとんど眠ったまま身じろぐ姿に笑みが零れる。片腕で支えながら、そつとこめかみへ唇を寄せた。

毎日触れることで、ずいぶんと敏感になったはずだ。

このまま他に彼氏なんて作れないくらい敏感になればいい——そう思い

ながら保湿ケアを終わらせて、乱れた服を整えた。

ベンチに横たえ、タオルケットをかけてやる。

起きるまでの間に器具のメンテナンスでも済ませておこうかと思った矢先、コンコンと入口のドアをノックする音がした。

「……恭平？」

「あ、やっぱりまだ千隼さんいた！ お疲れっすー」

「お疲れ、どうしたんだよ、もう閉店してるぞ。忘れ物か？」

「はい、腕時計忘れちゃいました！ 近くの飲み屋行ってたんで、千隼さんまだいるかもって思ってた」

ドアを開くと、そばかすのある頬をいつもより少し赤らめて、屈託のない笑顔を向ける青年——恭平が立っていた。

最近雇った若手のジムトレーナーだ。明るく人好きだがその分飲み歩きも好きなようで、今日も飲んできた後のようだ。

「顔赤えぞ、程々にしとけよ」

「はい！ つつても俺めっちゃやすぐ顔に出るタイプなんで、これでも一杯だけでー……あ、あつたあつた」

トレーナー控室の机に置かれていたスマートウォッチを取って安心したように肩をおろした恭平が、ふいにこちらを覗き見てきた。

「閉店後なのにすんませんでした、ありがとうございます！ てか、千隼さん  
「ん？」

「今、えーつと……ほかに誰か居るんすか？ あつ、あのベンチで寝てる  
コ？」

そこまで言われて、ああ、と声が出る。控室にこはるの鞆や私物があつたからだろう。

トレーニングルームの鍵は閉めてあるものの、ガラス張りなので眠るこはるの姿が見えてしまっていた。油断したな、なんて思う。

「おう、俺の幼馴染で、まあ……妹みてえな。今ちよつとうちでトレーニン

グしてんだよ。閉店後に特別にな」

「へえー幼馴染？　なんでまた突然」

「あー、なんか、自分磨き？　大学入ってから気になりだしたみたいでな」  
「ふーん……それで疲れて寝ちゃったんですか」

トレーニングルームで眠るこはるの様子をまじまじと見つめ始める恭平にため息が漏れる。

——トレーナーとしては申し分のない仕事ぶりで良い奴ではあるが、い  
かんせん合コンやマツチングアプリアが好きで男なのだ、コイツは。  
早く帰れと言いかけた矢先、期待した声と共に顔を向けられた。

「えー、かわいい。彼氏いるんですか、このコ」

「……………」  
ぴく、と青筋が立つ。笑顔を保ちたいが無理そうだ。

俺はがしりと恭平の肩に腕を回し、そのままほとんど無理やり入口まで連れて行った。

「恭平。忘れ物取ったろ。もう帰れ」

「え、えつ何ですか、ちよ、待って転ける！ 妹なんですよね?! ちよつと彼氏いんのか気になっただけじゃないですか、何でですか!?!」

「お前がそれ知る必要があるか? ないだろ。いいから帰れ」  
「ひい、ハイ、すみませんした……っ」

ぐいぐいと押しやりながら睨めつける。

恭平は俺の剣幕に圧倒されたらしく、首を縮こまらせながら小走りでジムを出ていった。

少し走ってから思い出したように振り向いてお辞儀をする姿が見えて、悪い奴じゃねえんだけどな、と思いながら扉を閉める。

（妹、なあ……。最初は確かに、妹だと思つて面倒見ろつて言われたっけか）  
トレーニングルームに戻りながら、こはるが初めてうちに預けられたときのことを思い出す。

出会ったときのこはるは、まだ小学校に入る前で本当に小さかった。あの

時からあまり運動が得意じゃなくて、俺がちよつと転がしたバスケットボールを追いかけては転んで泣いていた。

“うああん、いたい……”

“こはる、大丈夫か！？ ごめんな、今絆創膏貼ってやるからな……！”  
“うあ……えへへ、ありがと、おにいちちゃん”

不器用に膝に貼られた絆創膏を、小さな小さな指で撫でながら笑うこはるを——あの時は確かに、妹のようだと思っていたはずだ。

それが変わってしまったのは、中学生くらいの頃だった。

バスケット部に入って、周りの女子中学生たちからチョコをもらったり、放課後に呼び出されることが増えた。普通の男子中学生なら相当舞い上がるはずの出来事に俺はちつとも興味が持てず、むしろ辟易とした気持ちになった時——もし、これがこはるだったら、と。

そう思ってしまった。

「……こはる。こーはーる、起きられるか？ そろそろ帰らねえと」

「んう……？ んん、やだ……」  
「やだって言われてもなあ……」

タオルケットを握りしめ丸まっている身体を揺さぶると、嫌がるように反対向きになってしまった。思わず苦笑が漏れる。

仕草も声もあの時から変わららず可愛いが、いつまでもこのまま寝かせているわけにはいかない。

「ほーら、起きろって。このままここで一晩過ごす訳にいかねえだろ？」

「うう……お兄ちゃん、いじわる……」

「意地悪で言っつてねえっつの」

ひどく眠そうにこちらを非難する声が聞こえてきて思わず吹き出す。

仕方なく肩に腕を回し上半身を抱き上げると、なぜか体重を預けられてしまった。随分甘えん坊に育てちまったなあ、と思いつつながら、まだ開かない瞼を眺める。

(……もう何回も、あんなこととして、あちこちキスしてんのかな。こはるの中では……俺はあの時からずっと、ただのお兄ちゃんのみんま——なんだろうな)

少し汗ばんだ額にそつと唇を押し当てる。

ようやくぼんやりと開いてきた臉を見つめながら俺は、遠いあの日——クラスで一番可愛いと持て囃されていた女の子からの告白を、断った時のことを思い出していた。

なあ、こはる。

お前は知らないだろうけど、俺は。

俺はあの時から、お前のことを妹だと思ったことなんか、一度だってなかったよ。



「よーしよしよし、プラス十回できたじゃねえか、こはる〜！ よく頑張った、偉い、日本一！ いや世界一！」

「はーっ、はー……っテ、テキトーな、こと……いつてえ……！」

やっとチェストフライのトレーニングが終わって、ぶわりと汗が噴き出す。

一昨日も大変だったのに今日は更にキツかった。

千隼お兄ちゃんがたくさん声をかけてくるからつい頑張ってしまう。

そろそろ何かご褒美が欲しいなあ、なんて思いながらヘロヘロとベンチへと戻ると、どこか得意げに笑ったお兄ちゃんが何やらカラフルな箱を差し出してきた。

「ほら、これ。頑張ったからご褒美な」

「！ わ……アイスだ。買ってくれてたの？」

「そろそろ欲しくなる頃かと思っさ」

「やったあ、ありがと……！」

わくわくして開いた箱の中には、わたしの好きなフレーバーしか入って  
いなかった。

嬉しい。今日は一個だけにしておこうといちごのアイスを取って、残りは  
冷蔵庫にしまった。

なんだかうまいこと手懐けられているような気がするけれど、それはそ  
れとしてアイスはおいしい。

もぐもぐ食べながら休憩していると、お兄ちゃんも隣に座ってプロテイ  
ンドリンクを飲んでいた。

(……あれ？ 今日、しないのかな……)

昨日のことを思い出してじんわりと恥ずかしさを感じつつ、千隼お兄  
ちゃんをちらりと横目で見ると、気付いたお兄ちゃんに視線を合わされた。

「……もう終わりかな、って思ってる？」

「えっ、な、なんで、わかるの」

「ははっ、やっぱりな。こはる昨日……やだ、怖いって言ってたろ。昨日は頑張ってみるとは言ってたけど、今日はどうかと思つてさ。嫌になつたりしてないか？」

「あ……」

ぴくりと肩が揺れる。思つたより気にさせてしまつたみたいだ。

アイスカップの、最後の一口を掬いながら考える。確かに——おっぱいだけでイクのは怖いし、トレーニングはきついこともある……けれど。

「それは……身体が変になりそうだったのが、怖くて……」

「そっか、怖いか」

「うん……でも、わたし、その……」

「……ん？」

正直に言うのが恥ずかしくて視線を逸らして口ごもる。

絶対に顔が赤くなつてしまつている気がするけれど、まっすぐこちらに視線を向けるお兄ちゃんに少しでもちやんと応えたくて口を開いた。

「お、お兄ちゃんとトレーニングするの……嫌になったわけじゃ、ないよ」  
「——！ そうか……ははっ、そうか、良かった」

嬉しそうに笑う声が聞こえてほつとする。

恥ずかしかったけれど、ちゃんとやって良かったかもしれない。

安心して最後の一口を食べ終えたところで、お兄ちゃんが屈んでベンチの横に置かれていた大きめのメッシュバッグから何かを取り出しているのが見えた。

「よし。じゃあ、今日は別のやつにするか」

「え、あ……う、うん……？」

別のやつってなんだろうか。

バッグの中から取り出されたのは、ジムでよく見るようなマットだった。お兄ちゃんサイズだからだろうか、すごく大きい。目の前でくるくるとマットをトレーニング室の床に広げられるのを不思議そうに見つめていた

ら、広げたそこに来るようぼんぼんと叩かれた。

「もつと楽なトレーニングだねえかなと思って、ヨガマット持ってきてみたんだよ」

「よがまつと?」

「そうそう。ほら、おいで、こはる」

「? う、うん……」

恐る恐る膝をつくと、マットはふにやりと柔らかく、すべすべの生地で気持ちよかった。

どうしたらいいかわからなくて、お兄ちゃんのそばにぺたんと女の子座りをする、笑ったお兄ちゃんがわたしの肩を抱いた。

「ひゃ……っ」

「よっ、と。こはるは、今日はこうやって横になってるだけでいいからな」

視界が反転して暗くなる。

突然のことですぐわからなかったけれど、マットの上に寝かされたらしい。

腕をついて、わたしに覆い被さってくる千隼お兄ちゃんと目が合った。

「ね、寝てるだけでいいの……？」

「そう。楽だろ？」

確かに楽だけれど、それだけで本当におっぱいが大きくなるのだろうか。そう思っているうちに、する、とシャツの中に手を入れられる。

いつもと違う体制が恥ずかしくて目線をきよろきよろさせていると、ふつと柔らかく微笑まれてまた心臓が高鳴った。

——やっぱり、このトレーニングの時だけ、お兄ちゃんの雰囲気が変わる気がする。

「おに……い、ちゃん、これ恥ずかしい……っ」

「ははっ、なんだよ、顔赤くして。昨日より楽だろ？ ほら、バンザイ」

「ひゃっ……ほ、ほんとに恥ずかしいんだってば、あっ♡」

からかうように促され、あっさりシャツを脱がされてしまった。  
前より少し張ってブラを持ち上げている胸元を確認するように撫でられる。

「やっぱでつかくなってんな。こはるのおっぱい、ブラに締め付けられて苦しそうにしてる……」

「うう、やだ、まじまじ見ないで……ん、う……っ♡」

ホックを外された衝撃でおっぱいがぶるんっ♡ と揺れるところを見られてしまった。

毎日繰り返し触られたせいだろうか。たったこれだけのことなのに、身体がじんわりと熱くなってくる。

もう覚えてしまった。

これから……気持ちいいのがくるんだ、ってことを。

「……はは。こはる、そんなにほつぺた赤くしてたんだな。可愛い……」

「だっだって、お兄ちゃんが……あっ!?!?♡ うう、くすぐったいい……♡」

お兄ちゃんの癖のない髪がぱさりと胸元にかかる。そのままちゅ♡と胸元に吸い付かれて思わず身を振った。

大人しくしてろって言うみたいに関手をマットに押さえつけられて、ちゅ♡♡ ちゅ♡♡ とわざとらしく音を立てながら膨らみを吸われる。恥ずかしさでぶわりと全身が熱を帯びた。

(こ……これ、なんか、ほんとにえっちする時の体勢みたいで……どうしよう、恥ずかしい♡ ドキドキしてるの、絶対バレちゃってる……♡)

「ふ、すつげえエロい顔。やつぱり、こうやってちよつと無理やりされるみたいなのが嬉しそうにするよな、こはるは……♡」  
「そっそんなこと、つうあ!?!?♡ やあ、吸っちゃ、っんん……♡」

ちゅ♡う♡う♡……♡♡  
れろ♡♡ れろれろ♡♡

両手首を押さえつけられたまま、先っぽを吸われてびくんと身体が仰け反る。またあの、腰の奥から這い上がるような熱を感じてどうにもじっとしていられない。

「ン……こーら、あんま動くなつて。マツトずれちまうだろ？」

「つううぐ♡ だって、こんなの……ほ、ほんとに、えっちしてるみたいで、恥ずかしい、つうあ……っ♡」

もぞもぞと上へ逃げているのを気付かれてしまった。

言い訳をするように零した途端、両手首をまとめあげられ、頭上で抑えられる。

恐る恐る見上げた千隼お兄ちゃんの整った顔は、興奮したような、けれど少し不機嫌なような——見たことのない表情をしていて、ぶわりと鳥肌が立った。

「……恥ずかしくないだろ？ お兄ちゃんとなんだから。ただの練習だつて思えばいい、胸大きくするついでに、ちよつとエッチの練習するだけ……」

な？」

「えっちの、れんしゅう……って、っうあ！？♡ あっうそ、だめえ、お兄ちゃん……！」

長くしつかりとした指が太ももを辿って、震える内ももを柔らかく撫でる。必死に首を振ってみてもお兄ちゃんは目を細めてこちらを見つめるだけでやめてくれない。

昨日までは知らなかった。

こんな、獲物を見るみたいな目で見つめられていたことを。

（うう、どうしよう、ぞくぞく止まんない♡ 練習だっって言われても、こんなにじつと見つめられてたら、変に意識しちゃって……ほんとにえっちらしってるみたいな気分には、っあ♡ だめ、おまんこの筋のところ、すりすりしないで……♡）

「だめって言われてもなあ……乳首だけでイクのやだっって言ったの、こはるだろ？ 今日ほこつちも触るから、横んなったまま、力抜いてイクイクし

ような」

「っ♡ ひっ♡ う、うづ……わ、わかった、っブっ♡」

すり♡ すり♡ くにくにくに♡

パンツの上から何度も指を往復されて、まだ柔らかいクリトリスを捏ねるように撫でられる。頭にびりびりと響くような、直接的な快感に首を仰げ反らせると、そのまま胸元にも吸い付かれて逃げ場がなくなってしまった。

「あっ♡ やあ、あつ、うづ……♡ おに、ちゃ、両方やら、ツア♡ ううっこれ、きもぢ、よすぎるからあ……♡」

「いいんだよ、そのほうが女性ホルモン出るって前も言ったろ。乳首もクリも、お兄ちゃんに触られて気持ちよくなってるって、ちゃん意識しような……?」

カリカリ♡ カリカリ♡ ちゅううう……♡

布越しに爪先で撫でられるのがたまらなく気持ちよくて背筋を反らすと、すぐに乳首を吸われてしまって逃げ場がない。こんなの恥ずかしくて嫌な

はずなのに、千隼お兄ちゃんさえうちの練習をしてるんだって思うと興奮が止まらなくて、身体がおかしくなつたみたいだった。

「ふツ……♡ うづ♡ やつ、ああっ♡ くり、だめっ、おあっ♡♡」

「裏筋すりすりされんの好きな、こはる。ここ撫でてやると乳首もむくむく♡ って勃起してくんの、エロすぎ……こっちもしっかり可愛がつてやるからな……♡」

「っやだ、いわないで、っうあ♡ だめ、だめえっ、っああ……♡」

ちゅ♡ れろれろれろ♡ ぢゅう~~~~っ♡

固くなつてしまった先っぽを飴玉みたいに舐められては強めに吸われて頭がとろけそうになる。

ゆるゆると撫でられているおまんこの方にもじゅわ……っ♡ と愛液が滲み出てしまつて、気持ちよくなつてるのがバレバレだ。

「ん……はは、もう濡れてきた？ こはるによく似た、素直でかわいいまんこだなあ……♡ 濡れてると気持ち悪いだろうから、今日はもう脱いじゃ

おうな」

「っうあ!?!♡ あっやだ、お兄ちゃん、み、見ちゃやだ、恥ずかしい……っ」  
「なあんだよ、もう何回も触ってんのに。今日はすげえ恥ずかしがるなあ、こはる……」

するする……♡ とあっさりパンツを脱がされてしまう。慌てて足を閉じようとしたけれど、すぐに千隼お兄ちゃんの引き締まった身体が足の間に割り込んできて閉じられなくなってしまった。

そのまま覆い被さられて、視界が全部お兄ちゃんदैいっぱいになって。ほんの少し目元を上気させ、興奮したようにこちらを見つめる顔から、目が離せなくなつた。

「……こうしてると、ほんとにセックスしてるみたいで、恥ずかしい?」  
「……!♡ っっっや……う、……っ」

吐息すらかかるほどの距離で囁かれて、ぶわりと身体の熱が上がる。何も言えずに唇を噛んでいると、何もつけていないおへその下をつつ…

…♡ と指先で辿られて、びくりと身体が震えた。

「ほんつと……可愛いなあ、こはるは。昨日も一昨日も一緒にトレーニングしてたのに、ちよつと体勢変えたくらいでそんな恥ずかしがつちまうんだ？」

「~~~~♡ だつて、これっ……お!?!♡ あつためえ、直接さわ、つちや……ンうう~~~~♡」

ぬちっ♡ ぬちっ♡ にゆちにゆちにゆち♡♡

お兄ちゃんの長い指が、おまんこから滲む愛液を掬ってクリトリスを撫でる。恥ずかしいはずなのに甘えるような声が漏れ出てしまうのが止められない。

さつきからずっと、意識してしまふ。

お兄ちゃんと、セックスみたいなことしてるって。

「クリはちよつと触ってるだけなのに敏感だなー……先っぽも好き？弱く撫でてると腰びくびくして気持ちよさそ……よしよし……♡」

「っひ♡ ひいつ♡ ンああっ♡ ぐらめ、おにいちゃん、そこ、よわいからあ……♡」

「弱い？へえー……じゃあこっちも鍛えねえと。ほんとにセックスする時、こんな雑魚クリなことバレちまつたら恥ずかしいだろ……？」

「っ！？♡ やっ♡ やら、おにいちゃんの、いじわるっ……あ、アッ、ん  
~~~~~♡♡」

にゅち♡ にゅち♡ ぬりゅぬりゅぬりゅっ♡

わざと羞恥を煽るような言い方と一緒に先っぽを捏ねられて頭がばちばちする。こんなのトレーニングじゃないんじゃないかって思うのに、気持ちよすぎた抗うことができない。

（うう、恥ずかしいのに、きもちいいの止まんない♡ いじわるなこと言われながら、興奮した目で見られるのやだ♡ 愛液止まなくて、どんどん腰浮いて……あ、あ♡ やだ、いきそうなのに一緒に乳首触るのため、きもちよすぎるからあ……っ♡♡）

「はは……意地悪なこと言われて腰浮かせていきそうになってんの、可愛すぎるだろ……♡」

「っブ、あ♡ ううっお兄ちやつああ♡ ちくび、さわらびやいでっ、もおいクからあっ♡♡」

「んー？ 駄目だって、これはおっぱいでかくするトレーニングなんだから、乳首も一緒にしねえと。クリだけでイッたら、ただのセックスと変わらなくなっちまうだろ……？」

ちゅこちゅこ♡ にゅこにゅこ♡ ちゅううう~~~~~♡……♡

トレーニングだっと思ったところで、一緒にされたままなら絶頂感を止められない。すっかり勃起し上がってしまったクリを指腹で扱かれながら乳先を吸われ、足先がぴん……♡ と伸びていく。

纏るものが欲しくてお兄ちゃんの高い背中に抱きつくくと、なぜか嬉しそうな吐息が聞こえて、それでもう、頭が真っ白になってしまった。

「っひ♡ ひい、ううづっ♡ らめ、らめっ、いくう♡ おに、ちや、っああイク、いっちや、うづ……♡~~~~♡♡」

ぎゆうっと抱きついたまま、びくんっ♡ びくびくっ♡ と何度も腰が跳ねる。

応えるように頭を抱かれて、とろけるような多幸感のまま絶頂に浸ってしばらく経ったあと、少し息を詰めたお兄ちゃんが身を起こした。

「よしよし……イクの上手になったなあ、こはる♡ 頑張ったなあ、可愛かった……」

「ふあ、ン……♡ うう、ほ、ほんと……?」

「ほんとほんと。でも、さ……」

甘やかすみたいに耳元へキスされながら、いったばかりでまだびくびくと震えるクリトリスをゆるゆると撫でられて、ぞわ……っ♡ と快感が戻ってきてしまう。

慌てて逃げようとずり上がるものの、いとも簡単に片腕で引き戻されてしまった。

「こはる、ココ触られるとすぐイクようになってしまったよな。ほら、いったのにまだ震えてびくびくしてる、ココ……」

「ふえっ、あ、あっ♡ やらあっ、お兄ちゃん、いま触っちゃ……っ」

「ほら、すげえ敏感……こんなによわよわまんこだと、ほんとにセックスする時すぐバテちまうかもしんねえぞ……?」

ぬり♡ ぬりゅっ♡ こしこしこし……♡

優しく優しく裏筋から先っぽを撫でられて落ち着くはずの身体がまた昂ってしまう。ひくひく♡ とおまんこの入口が勝手に収縮して愛液が溢れたのをバレたくなって必死に腰を引いた。

「うづっ♡ よ、よわよわじゃ、ないもん……っバテたり、しない……っうあ!?!♡」

「よわよわだろ、一回イっただけで全然力入らなくなっ。ほんとのセックスだったら、これからもっとすごいこと、するんだぜ……?」

耳元に直接吹き込むくらいの距離で囁かれながら、ぬちゅっ♡ と音を

立てておまんこの筋を撫でられて、恥ずかしさで喉がきゅつと締まった。

(そんな、ひどい♡ こ、こんなになっちゃったの、お兄ちゃんのせいなのに……っ♡ 毎日毎日、千隼お兄ちゃんが、乳首とか、お、おまんことか、スリスリっしてしてきたからなのに……!♡)

「ちがうもん……っ! これは、お兄ちゃんの、せい……っお兄ちゃんが、え……えっちな触り方、するから……っ」

「……へえ。俺のせい?」

——あ、やばい、怒らせたかも。

低まった声のトーンにひゅつと喉が締まった瞬間、ぐい、と足を開かされる。

慌ててごめんなさいを言おうとしたけれど、もう遅かった。わたしの愛液をまとった指が、ぬち♡ ぬちっ♡ と割れ目のお肉をかき分けるようにして潜っていく。

「そっかそっか、こはるは俺のせいであんな身体になっちゃったんだよな。じゃあ、こはるのよわよわまんこも、兄ちゃんが責任持つて、鍛えてやんねえとなあ……?」

「ふえ、あつ? うそ、まって、お兄ちゃん、ごめ……つごめ、ごめんなさ、お♡ あっダメ、ナカ、やあああ……つ♡」

ぬぷぷぷ……っ♡♡

一度も他人に触れられたことのない内壁に、お兄ちゃんの指が埋まっていく。濡れた膣壁をゆっくりと押し広げられるのがなぜか気持ちよくて背筋が仰け反った。

(やだ♡ やだ♡ 自分でもナカ、ほとんど触ったことないのに♡ ずりゆずりゆ擦られながら、奥まで入りこまれちゃうの……くるしいのに、きもちよくて♡ 勝手に入口きゆうって締まって、お兄ちゃんの指、嬉しい嬉しいってしちゃうよお……♡)

「あーすつご、ナカ熱くてとろとろ……けど流石にきついな、大丈夫か、こ

はる？」

「はっ、ふうう♡　ふうっ？♡　うう、大丈夫じゃ、にゃい……んうう♡  
♡♡♡」

「ふ、そっか、大丈夫ではねえか。……痛くはねえ？」

「んえ……っ？　あっ♡　ん、んう……っいたくは、ない……♡　ふう、  
んうう♡……♡」

ずにゅっ♡　ずにゅ♡　ずぬ♡♡♡♡♡

衝撃を受け止めるのに精一杯で、ぼんやりと答えているうちにゅっくりと抜き差しを繰り返され、徐々に奥まで割り開かれていく。

少しでも楽になろうと深呼吸をしていると、いい子だなっっておでこにキスされて力が抜けた。

「よしよし、奥までお兄ちゃんの指、上手に飲み込めてる……じゃ、おまんこトレーニング頑張ろうな、こはる♡」

「ふえ……あっ、えっ、おんツ！？♡　まっ、あああっ♡　まっへ、おにいひゃ、うああ……っ♡♡」

ぬぼっ♡ ぬぼ♡

ぬちゅぬちゅぬちゅっ♡♡

慣れてきたとわかった途端、激しく動かされて目の前に火花が散る。今までの、快感の芯を撫でられ続けるのとは違う、おなかの奥に深くたまる快感に頭がおかしくなりそうだった。

(何これ、きもちい……っ♡ イクイクしたあとのおまんこズポズポするのため、出し入れされる度気持ちいいの戻ってきて無理だよ♡ あダメ♡ 一緒にクリにゅこにゅこ撫でないで、気持ちよすぎて入口くぱくぱしちゃうからっ♡ あ♡ ダメ、ダメ、指、増やされ、て……っ♡♡)

「二本目も簡単に入っちゃまうなあ、こはるのまんこ♡ マン汁とろとろ溢れさせて、メスの匂いぶんぶんさせて、誘ってるみてえ……♡」

「ひう♡ ぐ~~~~…:…っ♡ さ、誘ってない、っあああ♡」

「誘ってるって。こんなメスの匂いさせてたらこわーいおじさんに狙われて、よわよわまんこに無理やりちんぽハメラれちまうかもしんねえぞ」

「ひ、~~~~っ!?!?♡ やっやらあ、そんなの、だめ、ぜったい……っ♡」  
「駄目だよな? じゃあ俺とトレーニング頑張ろうな? ほら、腹に力込めてまんこ締めろ♡」

畳み掛けるような言葉にまた思考を奪われていく。

言われるがままお腹に力を込めると、おへその下を開いた手のひらで、ぐ……っ♡ と押されて、びっくりしたおまんこがきゅうんっ♡ と締まった。

それなのに抜き差しする手は止めてくれなくて、余計に内壁がずりゆずりゆ♡ 擦られて、重たい快感が襲ってくる。

「ひ、ぐっ♡ んぐっ、うう~~~~っ♡ おにいひやっ……なんで、おなか、おすの、やらあおっ♡♡」

「力込めんの手伝ってんだよ。ほらここ、わかるだろ? 奥んとこ、ポルチオっっーの。ここに力込めて、おまんこきゅうっつて、締めっけんだよ」

「うぐ……っ♡ んうっ♡ ぐ~~~~っ♡♡」

ずぼっ♡ ずぼっ♡ ずぼっ♡

とちゅとちゅとちゅっ♡♡

言われた通りに一生懸命お腹に力を込めるけど、お兄ちゃんのごつごつして長い指が奥まで入っているのを感じてただ気持ちよくなってしまうばかりで、意味があるのか全然わからない。

（うう、頑張って力込めるけど気持ちよくてすぐ力抜けちゃう♡ ただおまんこヒクヒクさせながら、お兄ちゃんの指でちゅこちゅこ掻き回されるだけになってて恥ずかしすぎるよお……っうあ♡ あ、奥、おく♡ お腹押されながらされるのやだ、なんか、ヘン……っ♡）

「力抜けてんぞ、こはる。腹押さえられて、まんこの中にゅこにゅこ擦られてても、しっかり力込めねえと。ほら、頑張れ、頑張れ♡」

「ひいっ♡ む、むりい、っんんう♡ つア♡ だめ、奥、おくやだ、お兄ちゃんっ♡」

「もう奥気持ちいい？ はは、ちよっと触ったぐらいでこんなヨがって……ほんつと、よわよわ雑魚まんこなんだからなあ……っ♡」

「あぐっ!?♡ やあっ♡ やら、おにやか、やらっあああっ♡」

ぐっ♡ ぐっ♡

とちゅんっ♡ とちゅんっ♡ とちゅんっ♡

少し身を乗り出したお兄ちゃんに、手のひらに更に力をかけられながら、ピストンするみたいに何度も奥を行き来される。外からも中からも圧がかかって、それなのに痛くないどころか気持ちよくなる一方で、もう訳がわからない。

「はは、すっげえ締め付け、上手に奥のほう膨らませてぐぼぐぼできてんなあ、こはる。つつてもまあ、勝手になってるだけだろうけど……♡」  
「やつ、あ、うあっ♡ だめ、千隼お兄ちゃんっ♡ からだ、おかひ、あっだめ、またぐるっ♡ きちやうう、とまんによ、っああだめええっ♡♡」

びくんっ♡ びっくんっ♡♡

奥の深いところから波のようにうねる快感に身体がビクつく。またイっちゃったって思うのに、お兄ちゃんはじっと見つめたまま、ぬこぬこ♡ 抜

き差しするのをやめてくれない。

（やだやだやだっ♡ やめてよお♡ イクイクしてるのに♡ どうして止めてくれないの♡ 気持ちいいの終わらなくてつらい♡ にゅぽにゅぽ出し入れされる度ちっちゃく身体ビクビクして、あ、あ、またイク♡ もうむり♡ イクの、とまんない……っ♡♡）

「入口きゅんきゅん止まんねえなあ、こはる……あー、ちんぽ媚び上手すぎてイラつく……♡」

「ふあ♡ あうっ♡ あううっ♡ も、やめ、ええっ♡ いったう、いま、いったうから、っあああお……っ♡♡」

とちゅんっ♡ とちゅん♡ ずちゅずちゅずちゅっ♡

何を言われているのかよくわからない。ほとんど涙目になって頭を振っても止めてもらえない。

奥の一番だめになっちゃうところを、お腹側から手のひらで押しつぶして、中から何度も二本の指でノックされて、それが気持ちいいってことしか

わからない。

「もうずーっと甘イキしてんなあ、こはる……ほんと、可愛い……♡ このまま指ピストン続けるから、しっかりおまんこトレーニング追い込んでいこう、な……♡」

「あっ♡ あっ♡ だめ、もおだめ、も、ああっ♡ も、いつへう、のび♡♡ あ、あっ、またくる、おっきいの、きちやうからあ……♡♡」

ちゅぽちゅぽちゅぽっ♡ とんっ♡ とんとんとんっ♡♡

血管の浮いた太い腕で弱いところを延々突かれて、もうどこにも力が入らない。足をガニ股に開いたみつともない格好のまま、腰の痙攣だけが止まらない。

——それなのに。

「はは、なんだよ、もう本気イキしちゃうの？ トレーニングなんだからもうちよつと我慢しろって」

「っひう！？♡ むっむり、できにや、っああ♡ やめ、むりっ、がまんむ



が真っ白になった。

「ん♡ いいぞ、こはる、イケ♡ お兄ちゃんに一番エロいイキ方するとこ見せろ♡」

「っづあ♡ おあだめ、イク、イク、イ……つきゅ、うう、うあああお〜〜  
〜っっ♡♡」

びくんツツ♡♡

ぷし……っ♡♡ ぷしゃっ♡♡ ぷっしゃああ……っっ♡♡

びくっ♡♡ びくっ♡♡ と、断続的な痙攣が止まらない。わたしは一際大きく身体を反らせ、激しくイってしまった……♡

回らない頭で、どうしよう、おしっこ漏らしちゃったかも、っと思うけれどあまりの快感に頭がとろけてしまって何も言えない。まだちよろちよろ……♡ と出てしまっているのに、嬉しそうなお兄ちゃんにぎゅっと抱きしめられてしまった。

「よく頑張ったな、こはる……初めてのポルチオイキで潮吹きまで出来る

と思わなかった。身体、大丈夫か？」

「は、ふ……………♡ ん、うう、お兄ちゃん……………ごめんなさい、わたし……………ジムで、お、おもらし……………」

「んー？ はは、おもらしじゃねえよ。これはこはるがしつかりトレーニン  
グできた証……………気持ちいいと出るもんだから。汚くもねえし、マットの上だ  
しな」

「そう、なの……………」

潮吹きって言うんだぜ、と優しく説明してくれるお兄ちゃんに抱き起こ  
される。

まだ身体の痙攣が収まらない。わたしは千隼お兄ちゃんの大きな胸に抱  
かれるまま凭れかかり、広い背中に腕を回した。

「こはる、これからもお兄ちゃんと一緒に頑張ろうな。こはるのトレーニン  
グは、俺が全部付き合うから。絶対、他のやつに触らせんなよ？ 怖い思い  
するかもしれないからね。だから……………お兄ちゃんにだけ、な」

優しく語りかける言葉に、どこか意識がぼんやりとしてしまつて。

その時はただ小さく頷いて、うん、わかつた——と言う以外のことが、できなかつた。



シャワーを浴び、千隼お兄ちゃんに送られて家に帰つてきた後。

わたしは部屋のベッドにごろんと寝そべり、今日のことを思い出しながらため息をついていた。

(……まだ、おなかの奥、ヘンな感じする)

じく……♡ と疼くような感覚がいまだに止まない。

シャワーを浴びている時も、お兄ちゃんと一緒に帰る時も、ずっとじくじくしていておかしかつた。いつもより口数が少ないわたしを心配したお兄

ちゃんが、心配して顔を覗き込む度にまたドキドキしてしまって、誤魔化すのが大変だったくらいだ。

(初めて、潮吹き？ とか、しちゃったし……身体がびっくりしてるのかな)  
ぎゅっと膝を抱き、早く収まらないかと思うのに、そう思うほど意識して  
しまう。

いままでずっと、不思議なほど痛くなかったお兄ちゃんの手つきや指の動き。少しごつごつしているけど、どこを触られても嫌じゃなくて、あったかくて、気持ちよくて。

(お兄ちゃんって、ずっとわたしの反応見ながら、負担かけないように触ってくれて……ダメ、思い出すともっとじくじくしちゃう。せつかくわたしのために、トレーニングしてくれてるのに……)

強い快感に力の入らないわたしの身体を、ずっと支えてくれていたお兄ちゃんの逞しい二の腕。

考えれば考えるほどドキドキしてしまって、ぎゅつと丸まるみたいに膝を抱く。

(うう、どうしよう。このままじゃ……)

思い出してしまう。

快感でぼんやりとした視界に写った千隼お兄ちゃん表情。

いつもシュートを決めてとびきりの笑顔を見せる整った顔が、あるときだけはわたしだけを捉えて、興奮に染まっていたこと。

(このままじゃ、わたし……千隼お兄ちゃんのこと、好きに、なっちゃおう)